

龍樹造・佛三身讚及其疏

寺 本 婉 雅

【目次】 (一)佛三身讚及其疏に就て

(二)西藏所傳龍樹造・佛三身讚

(三)西藏所傳龍樹造・佛三身讚疏

(一) 龍樹造・佛三身讚及其疏に就て

佛三身論に就ては漢譯大藏經の中に二種あり、何れも趙宋の時代に法賢三藏が奉詔して音譯し、又義譯したもので、前者は『三身梵讚』(藏帙、第九、七〇右)であり、後者は『佛三身讚』(西土賢聖撰、法賢譯、成帙、第十三、七二右)である。この漢譯所傳に相當する『三身讚』と、『三身讚疏』との二書を西藏所傳の「丹珠爾部」首函中に發見し、『佛三身讚』は既に大正七年十月初旬之を和譯して公表した。(佛教研 究誌)今『三身讚疏』を譯出し、之を公表するに際し、前に譯出せし『三身讚』を『三身讚疏』と對校し、兩書の寫誤を訂正し、之を再譯して『三身讚疏』と共に併せて此處に發表することゝした。

藏傳の『佛三身讚』は法賢譯のと一致する。その辭句と文意とに多少の廣略と轉換あるも、その原本には當時既に異本ありしを見るべく、從つて法賢は『三身梵讚』の音譯を無名の書なりとし、『三身

讚』を「西土賢聖集撰」なりとするに至つたものであらうか。「西土賢聖集撰」とは「西土の賢聖の集撰なり」との意に解すべきものとするも、「賢聖」とは人名にあらずして著者への尊稱であらう。著者は何人であるか。爰では不明である。然るに藏傳の『三身讚』はその卷末に龍樹 (Kūṣi-Sṛub, Nā-sarjūna) の造とし、印度の律師クリシュナ、バンディタと、藏人翻譯官ゲロンツチム、チャルバとの共譯で、國王の允刊なりとあり。和譯によつて藏漢二種は、その内容の同一異本なることを知り得たのである。藏傳の卷末に「聖龍樹に依て造らる」とあり。「聖」とは語原 Arya の藏譯 hPhags-pa であつて、後人が龍樹に對する尊稱である。漢譯の「賢聖集撰」とは、著者へ對する尊稱であつて、人名でないことが知らるゝであらう。或は龍樹は大乗佛敎の中興者として仰がれ、第二の釋尊として尊稱せられたるが爲めに、龍樹の著書を單に「聖」又は「賢聖の集撰」と呼做して流用されてゐたのであるかも知れない。是に依て「三身讚、賢聖集撰」は龍樹の著書たることは明瞭となつた。

余の和譯したる藏傳の『三身讚』に基づき、神博士は法賢が音譯したる『三身梵讚』を校訂し、是を梵語に還源し、併せて和譯して余と共に同誌上に發表せられた。そしてこの『三身梵讚』の詩形は、「所謂アールヤ、ギータイ (Arya-giti) と稱する構造であるとし、其の内容より推せば、正しく中道の思想を表詮し、其の用語も『中論』等に於て屢々見るがごとき用語なれども、アールヤ、ギータイのごとき複雑なる詩形は、果して龍樹の時代に於て已に一般の風尙たりしや否は、余は未だ輒く

意見を定むることを得ず」と言はれた。併しその後博士は前説を改めて *Vasanta-tiaka* 卽ち「春のかざし」(春の冠)と稱する七々調四句の詩形なりと訂正し、且つこの詩形は迦賦色迦王時代にも存するものであると言はれた。若し『三身梵讚』が「*Vasanta*、*Tiiraka*」調であるとすれば、華嚴經の如きものは同じく「*Vasanta*、*Tiiraka*」調であるから、既に龍樹以前に此の詩形は存してゐたことは疑ふべくもない。龍樹の造としての三身思想を顯せる『法界讚』(*Dharma-dhātu-stotra*, *Chos-kyi dByins-su bStod-pa*)^{〔丹珠爾部首函、讚頌統〕p. 78a-77} や、唯識思想を顯はせる『大乘二十頌論』(*Maḥāyāna-Viṅśakai Theg-pa-chen-po Ni-qu-pa*)^{〔丹珠爾部〕Gi. XXXIII, p. 211b-212b}、或は『眞諦讚』(*Paramārtha-stotra*; *Don-Dam-par bStod-pa*)^{〔丹珠爾部首函〕p. 83a-81a} は何れも龍樹の造としてあれど、各々七々調の四句構造の詩形である。この西藏傳の『三身讚』のみは甚だ複雑なる詩形にして、法身讚は毎句 6、13、8、6、7、6、6、6、7、10、4、6の順次にて成れる十一句、報身讚は毎句 12、6、4、4、4、7、6、6、9、6、6、7の順次にて成れる十一句、化身讚は毎句「8、11、8、11」「6、6、7、6、6、9」の順次の十句より成れる構造である。これは龍樹の『大乘二十頌論』や、『法界讚』等の詩形に比せば稍や相異してゐるから龍樹の著書ではないやうに思はれるであらうが、併し、『三身讚』を註釋してゐる『三身讚疏』の卷末の「廻向文」によれば、「吾(龍樹)は茲に歳老いて殆ど高齡に達せしかば、精釋を最も詳かにし、意義に隨順して此に論證せり」とし、最後に「阿闍梨耶龍樹の造にして、三身讚と名くる

疏は完結す」とあり。是に依て見れば、この『三身讚疏』は彼が高齡に達せし時代の著作であることが判る。藏傳の『中論無疏論』はその頌と疏とは共に龍樹の自作であつて、漢譯『中論』の如き、頌のみは龍樹の作であれど、釋は青目菩薩の註釋であるが、この『中論無畏疏』の中には、龍樹の自著たる『七十空性偈』を引用してゐる。そして是等の『中論』は『大智度論』中の處々引用してゐるより見れば『大智度論』は龍樹の中年以後の百科全書であることが知らる。従つてこの『佛三身讚』と『佛三身讚疏』は、『大智度論』製作以後の時代に於ける述作であることは疑ひないであらう。されば『大智度論』に龍樹は法身、法性身、眞身、化身、生身等の名目を以て二身論思想を示してゐれど、未だ法、報、應三身思想を顯はしてゐない。この『智度論』の二身思想に基いて、龍樹及び其時代には三身思想はなかつたので、三身思想は龍樹以後に於て生じたものであるとは古來よりの誣點であつた。

ターラ・ナータ印度佛教史の第十六章には、この『佛三身讚』と『佛三身讚疏』とは、龍樹の弟子なる阿利耶提婆 (Aryadeva) と同時代出世の龍叫又の名龍猛 (Nāgajvaya, Ku-Bos) の著書なりとあり〔拙譯「ターラ・ナータ印度佛教史」p. 139〕とあれど、ターラ・ナータよりも以前に出世したる西藏の有名なる史家ブトン・リンポツェ師の著はせる『法源流聖訓密藏史』(Chos-kyi i-Byun-g-Nas g-Sui-Rab Rin-po-Chehi mDso-d Ces-Bya-b; p. 188; Ste-dGe) に據れば、『三身讚』と、『三身讚疏』と、『法界讚』(Dharmadhātu-

stotra, Chos-kyi dByins-su bStod-pa) の三書は龍樹の造なりとあり。(拙著『新龍樹傳』タール・ナータの研究』参照) タール・ナータが此二書を以て龍叫(又龍猛)の造であると言へり。この二書の卷末には明かに龍樹(Klu-Sgrub; Nāgārjuna)を署名してあれど、龍叫(Klu-Bos; Nāgahvaya)とは記してゐない。タール・ナータ史は恐らく龍樹と龍叫との語原を同一視したる誤解によつて、異名異人を同一龍樹の著書なりと見做したことに由るから、タール・ナータの説は誤謬であることは明かである。

龍樹の『大智度論』に言へる法身思想は、三祇百大劫の修行によりて獲得したる法身なりと云ふことが到處に説明してあるより考ふるに、彼の法身思想には報身の意味を含ませしめてゐることは明かである。

報身と云ふ語の最初に出てゐるのは、『阿毘曇毘婆沙論』卷第十(迦旃延子造、大正版第二十八、卷七〇頁)である。

「問曰生欲界中、得阿羅漢道、得幾地身廻轉戒。如罽賓沙門(佛陀提婆)說曰、得二十五地身廻轉戒……」

諸功德皆從方便生、如是所說、依彼地報身、起彼地身廻轉戒、無有_レ一時起二地報現
在前者、何況多也。」

この報身を得ることは三世諸佛皆等しく同一であつて更に變るところがない。そは三個の各條件を具備するものは、ひとしく法、報、化の三身を體得するからである。『阿毘曇毘婆沙論』卷第十(大正版第二八

卷、七）に、三條件と其の理由を擧げて説明してあり。

「問て曰、然らば施設經に云何が通じて、諸佛皆等しと説くや。答曰、即ち彼經説は三事を以ての故に等しと云ふ。……………」

(一) 過去世に行を積む皆等しとは、一佛の三阿僧祇劫に於て四波羅蜜を行ずるが如く、然る後ち阿耨多羅三藐三菩提を得る。諸佛も皆爾り。(二) 所謂法身皆等しとは、一佛の十力、四無畏、大悲、三不共念處を成就するが如く、諸佛も亦爾り。(三) 世間を利すること等しとは、一佛の百千萬那由他の衆生を度して涅槃に入らしむるが如く、諸佛もまた爾り。」

此の文の(一)「過去世積行皆等」とは正しく過去三阿僧祇劫に於ける菩薩修行の因願による報酬の報身佛出現を意味するものである。(二)一佛が十力、四無畏、大悲、三不共念處を成就して法身を得ずるとは、これ理想の正法を現身上に體現する條件的内容を示したものである。この法身中に既に因願修行による報身佛思想は含具せしめてあり。(三)一佛が百千萬那由他の衆を度して涅槃に入らしむとは、之れ化身又は應身の世間利益を示すものである。以上の文證によりて考ふるに、阿毘曇論には未だ法、報、化の三身と云ふが如き熟語を以ては佛身論を示されてはゐないけれども、三身成就の必須條件として三個の要件を説示してゐるのは、正しく報身思想を中心として法、化二身に關係せしめてゐることは疑ふべくもない。故に龍樹出世以前の阿毘曇教學に於て既に三身思想の

現はれてゐることは注意すべきである。三身論に就て別に研究論文を發表することは次號に譲ることとする。

(二) 西藏所傳龍樹造・佛三身讚

(一) 法身讚

三身讚と名くる(論)。

印度語

西藏語

日本語 三身讚

聖文殊童子に敬禮す。

「一に非ず、多に非ず、

自と他とを利益する大完全の根源たり、

「有」に非ず、「非有」に非ず、

虚空の如く、一味にして、

| Sku-gSum-la bSto-pa Shes-Bya-ba |

| Kāyatriya-stotara-nāma |

| Sku-gSum-la bStod-pa |

| hPhags-pa hJan-dPal gShon-Nur-Gyur-ba-la Pkyag-tTsai-to |

|| gGig-min Du-ma ma-Yin |

| bDag dan gShan-la Phan-ba Phun-Sum-Tshogs-Chen gShir-gyur-pa |

| dNos-min dNos-bo-Med-pa Ma-Yin |

| Nam-nk hah-Ltar Ro-gGig-Cin |

思惟しがたき本性を有す、

| Rloggs-par dKah-bahi Ran-bShin-Can |

罣礙なくして不變、

| Gos-pa Med-Cin Mi-hGyur |

寂靜に、無等、等、

| Shi-la Mi-mNam mNam-pa |

遍在を有して、戲論なく、

| Khyab-pa-Can-te Spros-Med-pa |

各々に自知せらるゝ諸佛の法身は、

| So-So Rai-Rig Rgyal-ba-Rnams-Kyi Chos-Sku |

何ものも喩ふべきなし、

| dPe-med Gan-Yin |

かの(法身に)吾は稽首す。」

| De-la bDag Phyag-hTsal-Lo ||

「我今稽首法身佛、無喩難思普知、充滿法界無罣礙、湛然寂靜無等等、非有非無性眞實、亦非多少離數量、平等無相若虛空、福利自他亦如是、亦非多少離數量。」(『佛三身讚』西土賢聖撰—法賢譯)

(二) 報 身 讚

「自の富裕は世間より超脱して不思議なり、」 || Rai-gi-hByor-pa hJig-Rten-las-hDas bSam-gyis-mi-Klah |

善修百の果を、

| Legs-mDsad bRgya-Yi hBras-bu-ni |

諸の慧を有するものゝ、

| Blo-Can Rnams-Kyi |

歡喜の發起の爲め、

| dGah-ba bSkyed-Phyir |

會衆の中に於て、

| hKhor-gyi Nan-du |

種々廣大に教わて、

| Sna-Tshogs Rgyas-par Ston-mDsad-Cin |

常に妙法の廣大なる音聲を、

| Rtag-du Dam-pa Chos-Kyi Sgra-Skad Rgya-Chen |

全世界に遍布し給ふ、

| hJig-Rten Kun-Tu hPhro bar mDsad-pa-po |

佛は圓滿報身にして、

| Sans-Rgyas Lois-Spyod Rdsogs-Sku |

法の王國に住し給ふ、

| Chos-kyi Rgyal-Srid gNas-pa |

(吾は)總て彼に稽首す。」

| Gan-Yin De-la Phyang-hTshal-Lo ||

「我今稽首報身佛、湛然安住大牟尼、哀愍化度菩薩衆、處會如日而普照、三祇積集諸功德、始能圓滿寂靜道、以大音聲談妙法、普令得平等果。」

(三) 化身讚

「諸の有情を成熟せしめん爲め、

|| Sems-Can Rnam-sni Smon-par mDsad-Phyir |

或ときは火焰の如く普く照らし、

| La-la-dag-du Me-jBar-bShin-du Gan-Snan-Shin |

或ときは圓滿菩提の爲め、

| Ya-la-du-mi Rdsogs-par Byan-Chub |

法輪を能く寂靜に普現し、

| Chos-kyi hKhor-lo Rab-du Shi-bar Gan-Snan la |

種々の方便と諸方法をもて、

| Sna-Tshigs-Thabs Tshul-Rnams-kyis |

多くの種類に(隨)入しつゝ、

| Rnann-pa Du-mar hJug-Cin |

三有の怖畏を除き、

| Srid-pa gSum-gyi hJigs-Sel-ba |

十方に完全に(遍在)し給ふ、

| Phyogs-bCur Chub-par-mDsad-pa |

諸の牟尼の化身にして、

| Thub-pa Rnams-kyi Sprul-Sku |

總て大利ある彼に稽首す。」

| Don-Chen Gan-yin De-la Phyags-hTshal-Lo ||

「今稽首化佛身、菩提樹下成正覺、或起變現或寂靜、或復往化於十方、或轉法輪於鹿苑、或現火

光如光聚、三塗苦難艱悉能除、三界無比大牟尼。」

(四) 廻 向 文

「有情の利益を專一に絶へず行じ、

|| Sems-Can Don-gCig Rgyun-du mDsad-Cin |

無量の功德と大智慧より生じたる、

| bSod-Nams Ye-ges-Chen-po dPag-med-las Byun-bahi |

諸の善逝の三身は、

| bDe-bar gCegs-pa Rnams-kyi Sku-gSum |

意と語との道より超脱するが故に、

| Yid-dan Tshig-gi Lam-las Rab-tu-hDas-pa-la |

我は信を以て敬禮し、

| bDag-gi Dad-pas Phyang-Byas |

善き菩提の種子を總て積集せり、
| dGe-ba Bṛāh-Chub Sa-Bon bSags-par-gyur Giñ-Yin |

これに由て三身を獲得し、
| Des-Skū-gSum Thob-nas |

是等の群生を漏れなく、
| hGro-ba hDi-dag Ma-Ius |

菩提の道に決定して入らしめん。 | Bṛāh-Chub-Lam-lā Nes-par hJug-par-ḥog ||

「如是佛身充滿智、我常信解淨三業、以無量大福行、一心愍諸群生、以今願三身佛、所獲無漏功德種、願我速證佛菩提、盡引衆生歸正道。」

三身を讚ずと名くる(書は)、阿闍梨耶、聖龍樹(hPhags-pa Klu-Sgrub)によりて造られて完結す。

印度の律師「クリシユナ・パンディタ」(Kṛiṣṇa-Pāṇḍita) の翻譯官「ゲロン・ツチム・チャルバ」

(dGe-Slon Tshul-Khrims Rgyal-ba) の共譯にして允刊せり。(完)

(北京赤字版『丹珠衛部』首函「頌統會」p. 81b-82b)
大正七年十月初旬譯、昭和三年十一月御大典祝日訂譯)

(三) 西藏所傳龍樹造・佛三身讚疏

梵語 | Kāya-traya-stotra-nāmasya-vībarāṇāma |

藏語 I Sku-gSum-la bShod-pa Shes-Bya-bahi Rnam-par hGrel-ba |

日本語 『三身讚と名けらる疏』

文殊童子に敬禮す。

佛の三身讚は龍樹の造なり、他人の請はるゝが故に教示せむとす。如何に組織を精細に分別するや、曰くそは、

「一に非ず、多に非ず」(gGis-min Du-ma Ma-Yin) と云へるなどの三偈を説明せむとするに付て「叙述と必要と結合と要中之要」と云ふ(項目を以て)叙述せんとす。何故とならば「叙述と必要と結合」との分別なくば、前に興へし各々に於ける考察を受くるに堪へざるべし。是の故に茲に何が爲めに説明するやと云へば、そは愚者を正しく引入せむが爲めに叙述を説くなり。解釋に於ける無意義の考察を正しく引入せむが爲めに必要を示すなり。他に於て無法を如何に定むるや。それに付て此に三身を叙述すべきなり。

「かの自性」(Ran-gi 'Yo-Bo-Zid) を釋することは必要にして、かの自性を釋せむが爲めに此の偈を造りしなり。かるが故に必要と、偈の必要と、叙述の理由とを結合し、或は語と語句とを結合し或は語句と語句を結合し、或は方法と方法より生ずる理由を結合し、或は「能立」(gSrib-pa) を

「所立」(Sgrub-par-bya-ba)の理由を結合し、或は所作と能作の理由を結合するは即ち是れなり。斯くて努力と奮勵との精進を具して(著者)自身に依て三身の意義と、論義を究竟に達せしむるは、是れ要中之要なりと知るべし。これ應に意義の一般的のものなればなり。今左に部分的の意義を叙述すべし。

(一) 法身讚疏

「一に非ず、多に非ず」(gCig-min Du-ma Ma-Yin)等の(文)に就て——「一と多」と云ふは、一と多とにして、一とは第二なきものなり。多とは多くのものなり。「一と多とに變せざるかの法身に我は敬禮す」と云ふは誓願なり。

何が故に「一に非ず、多にあらず」と云ふや。蓋し「忍(智)より生せず、即ち不生なればなり」。(bZad-pa-Nas Ma-Skyes-pa)若し「緣起に由るが故にとならば」、初め其者より不生なり。この故に一と多との位置(條件)を以ては論ずること不可能にして、猶虚空の如く、全く間斷なき自性なればなり。そは「一切法は眞如より生ずるが故なり」。(Chos-Tham-Cad Kyah De-bShin-Nid-Ras Byun-bas-Na)

この故に總ては何より生ずるや。何に緣りて衆種の色に變ずるや。そは見るべからず。癡(Sa-mi)

等の種子より穀粒を生ずるが如し。是の如く空性 (Ston-pa-ñid) より總てを生ずれども、「常と斷」 (Rtag-pa dan Chad-pa) とにはあらず。如何となれば、一切の思惟を洩れなく離れたる諸勝者 (佛陀) は、それを空と幻影とに同じと觀すればなり。復分別して論せむが爲めに、

「自と他とを利益する大完全の根源たり」 (bDag-dan gShan-lā Phan-pa Phun-gSum-Tshog Chen gShir-Gyur) といふなり。

「自と他」と云ふは、「自と他」の(意)にして、「彼等を利益する大完全の根源たり」とは、「顯かに生天と、眞實に善勝の名義(理)ある大完全の根源となれり」との意なり。何が故に「法界は一と多とを離れたる自性にして、初と終となき空性なりや」と云ふや。そは罪障なければなり。

是の如く無明の種子の「薰習」(Vasana Bag-Chags) の力に依て(かの)器と液の状態にて住止する物の如く、「自と他とを利益する大完全の根源となれり」。猶夢を見るが如し。

若し「無明の薰習(種子)と、法界の初と終となき自性に於て、又これ無明の醉著(種子)するところなるは、猶麝香等に依て薰習せらるゝが如し」。諸相の法は是の如し。この故に「自と他とを利益する大完全の根源たり」となり。

復善知識に遇ひて賢道を獲得せば、無明の薰習は、忽然の間にせらるゝども、全て清淨なることは、猶金と共なる銅の垢を離るが如し」。この故に功德と共に罪障を受くることも捨斷せらるゝことあり。

るべし。そは何が故に言ふや。只如實の義を覺るのみにて殆ど盡滅せらるべし。この故に是に就て除明せらるゝ何ものもなく、又決定せらるゝ何ものもなし。(そは) 如實其者を如實に見るが故なり。如實を見れば總て解脱すと云ふ。是の如く縁を具するものは一切より煩惱を脱せらるゝが故に「不生を生なり」とは見ざるべし。「已生」(D_Skes_Spa) を分析するも亦少しも生(S_Stes_Spa) なるものなし、涅槃は燈焰に等しきなり。復分別して論せんが爲めに、

「有に非ず、非有に非ず」(d_Nos_S-min d_Nos_S-po Med_S-pa ma_S-Yin) と云ふ。その「有」(又は物) は色に於ける「存在」(Yod_S-pa) なり。その(色) なくば「有」はなし、其(者) より相反するが故に「有に非ず、非有に非ず」と云はれ、有と無の中より超脱せり。「其自」(tathva, De_S-vid) に由るが故に、「虚空の如く一味なり」。「虚空の如く」と云ふは、虚空に似て一味同等の「本性」(Ran_S-b_S-Shin, 自性) となれるものなれば、「虚空の如く一味なり」と云ふなり。「其自」に由るが故に。

「思惟しがたき本性を有す」(Rtogs_S-par d_Kab_S-bahi Ran_S-b_S-Sin_S-Can) となり。有と非有の共著と、他より尋求せらるゝことを離るなり。「其自」に由るが故に「障蓋なくして」(Gos_S-pa Med_S-Cin)、貪欲等の罪惡の污垢を離るなり。「其自」に由るが故に「不變」(Mi_S-b_S-Gyue) にして、「自の自性」は不易なり。

「寂定」(Shi_S-pa) とは一切煩惱を除滅せるものなり。「無等、等」(Mi_S-m_S-Nam m_S-Nam_S-pa) とは、相應するものなしとなり。「等」とは一切法の根源と相應することなり。

「遍在を有して」(Khyab-pa Can-te)とは、一切に行あり互ることをなり。「罣礙なし」(Spros-med-pa)とは、一切の障礙を離ることなり。復分別して論せば、

「各々に自知せらるる」(So-Sor Rai-Rig)と云ふ。これ諸有情の各々に依て自知せらるること、猶處女の幸福を問はるが如し。「諸佛の法身は」(Rgyal-pa-Knams-kyi Chos-Sku)と云ふは(この原文の註釋缺く)

「何ものも譬やべくなし」(dPe-med Gan-Yin)とは、譬を超脱し、如何に説明するも、亦相應するものあらず、如何なる言道も等しきものなし。是の故に比すべき總のものと比較し、分別せらるる根本の位置(條件)を離れて等しきものなきが故に、「かの(法身に)吾は稽首す」(De-la bDag Phrag-hTshal-Lo)と云ふなり。是の如きは法身にして、かの法身に吾は稽首すと云ふ。「是の如き」とは誰ぞや、曰く諸佛なりと云ふ。所有の憶念に依て心に恵まるゝが故に、身と意とを以て稽首すと云ふ意なり。

(二) 報身讚疏

「自の富裕」(Rai-gi hByor-pa)とは、三界の大自在者の名義なり。それを分別して論せば、「世間より超脱して」(hJig-Rten-las-hDas)と云ふは、世間より超渡せるの意なり。「不思議なり」(bSam-gyi-me-Khab)とは、心境より遠(離)せるなり。

「善修、百の果を」(Legs-mDsad bKgya-yr̄ ĩBras-du-mi) と云ふは、布施等の諸波羅蜜多を永劫に隨積するに由て生ぜしものなり。何に由て然るや。

「諸の慧を有するもの」(Blo-Can-Rnams-Kyi) と云ふなり。慈悲と見有義とを以て一切惡趣を捨斷し、一切苦惱を能く除滅する智者の云ひなり。何が故に然るや。

「歡喜の發起の爲め」(dGeĥba bSĥyed-Phyir) にして、誠に悅樂の因となる。

「會衆の」(hKhor-Kyi) とは、菩薩の衆團にして、その諸の「中に於て」(Nāi-du) と(云ふ)なり。

「種々」(Sna-Tshogs) とは、多くの種類と云ふことなり。「廣大に教へて」(Rgyas-par Ston-mDsad-Cin) とは、有情に對し種々敬虔なる(方法を以て)不可思議の力を示し、許多の異類に說法したまふことなり。

「常に妙法の廣大なる音聲を」(Rtag-du Dam-pa Chos-kyi Sgra-Skad Rgya-Chen)

「全世界に遍布し給ふ」(hJig-Rten-Kun-tu ĥPhro-bar mDsad-Par-Po) と云ふは、非常に廣大なる妙法の演說にして、一切に(遍)入するが故に廣大なり。是の如くば、その流れは絶えず弘宣せられ、甚だ廣大なる妙法を教へて説き給ふ。この故に斯くは言へり。

「佛」(Sais-Rgyas) とは、法の「自性」(De-Kho-na-nid) を本來の如く發見し、意中に悟得せるもの

を云ふ。「圓滿報身にじつ」(Lois-Spyod-Rdsogs-Sku) といふ。「圓滿に享受するの身」(Rdsogs-par Lois-Spyod-paki Sku) と云ふ義にして、十地の自在の諸菩薩は、諸種の教法によりて積徳修行して報身を成就し終へりとなり。是の故に復特に、

「法の王國に住し給ふ」(Chos-kyi Rgyal-Srid gNas-pa) なりと云ふ。「法の王國」の中に於て、又大なるが故に「法の大王國」と稱せられ、諸三界の主なり。その(王國)に住する身なるが故に、斯くは云ふなり。

(三) 化身讚疏

是の如く二偈を以て二身の自性を精しく開示し、化身(Sprul-paki-Sku)の自性(No-Bo)を教示せむが爲めに、

「諸の有情を成熟せしめんが爲め」(Sems-Can-Rnams-ni Smor-par-mDsad Phyr)

「或ときは火焰の如く普く照らし」(La-la-dag-du Me-jBar-bShin Gran Sma-shin) といふ。「諸有情を」とは、諸の生命を執著するのなり。何の故に然るや。「成熟せしめんが爲め」にして、全く成熟の意義に於てなり。何れの時に於てぞや。(曰く)「或ときは光焰」に似て光りを放ち、普く照らし、

光明を有するが故に、能く熾盛に現すとなり。何れの位置に於て照現するや。曰く。

「或ときは圓滿菩提の爲め」(La-la-du-ni Rdsoqs-par Bryan-Chub) にして、菩薩を覺れるもの、即ち佛陀となりし位置に於てなり。

「法輪を」(Chos-kyi-khKhor-Lo) とは、波羅捺斯城 (Vālinasi) の鹿野苑に於てなり。「能く寂定に普現し」(Rab du Shi-bar Gan-Snah-la) とは、「大般涅槃」(Yons-su Mya-Nan-las hiDas-pa Chen-po) を示し給ひしなり。復分別して云へば如何、曰く。

「種々の方便と諸方法をもて」(Sna-Tshogs-Thabs Tshul-Rnams-Kyis) と云ふ。佛は、獨覺は、聲聞と、菩薩と、梵主と、因陀羅と、自在天等の諸種の主に對して說法し給へりとなり。異類とは如何曰く。

「多くの種類に(隨)入しつゝ」(Rnam-pa Du-mar-hjug-Cin) と云ふ。教化せらるゝ多くの異類に隨入し給ふとなり。これを分別せは如何、曰く、

「三有の怖畏を除く」(Srid-pa-gSunng-yi hjug Set-pa) と云ふ。(これ)欲、色、無色の三有に於ける諸有情の生等の罪惡を遠離せしむるは、「怖畏を除く」となり。復分別して論せんが爲めに、

「十方に完全に(遍在)し給ふ」(Phyogs-bCur Chub-par mDsad-pa)

「諸の牟尼の化身にして」(Thub-ba-Rnams-Kyi Sprul-Sku) と云ふ。「十方に完全に(遍在)し給ふ」とは、諸の十方に随遍し給ふとなり。「諸の牟尼」とは、身と語と意との能力を具するが故に牟尼と稱せられ、即ち覺者世尊なり。

「大利」(Don-Chen) とは、顯かに生天と正しく善果を與へ、或は獲得せしむとなり。是の如き化身なる「彼に稽首す」(De-la Phyag-hTshal-Lo) とは、阿闍梨耶なる(吾)龍樹 (Ku-Sgrub) が(告白せる)言葉なり。「彼」(De) とは、是の如く教へ給へる佛陀なり。「誰ぞや」とは、主(牟尼)自らは功德と智慧とを積集して圓滿成就し、而して妙勝宮の兜率多 (Tusitah, dGah-I-dan) の不思議殿に住する白淨幢菩薩 (Dam-Pa-Tog dKar-po) が意の自性を以て慈と悲と喜と捨と四禪を次第に修習せる大瑜伽の究竟天 (Akanista, gNas-Hog-Min) に於て、顯かに五種菩提に依て如實に覺者となり給へりとなり。その後(世尊は)化身に依て一切如來「報身」(Lobs-Spyod-Rdsogs-pahi Sku, Sambhoga-Kāya) として住し、大蘇迷慮山の頂上に於ける大金剛寶の不思議殿上に往き、四種曼荼羅を顯かに化現し、再び兜率天の妙勝宮に住する白淨幢王 (Dam-pa-Tog dKar-po) と一體となりて入胎し、降誕して王妃の内庭に於て歡樂を盡くし、夜中王城を出で、苦行を修し、菩提樹下の金剛寶座に上り、惡魔を降伏し、現實に菩提を覺り、法輪を轉じ、最終の大般涅槃に至るまで洩れなく群生を利益したま

へり。(今)能く教へ給ひし化身に向ひて吾(龍樹)は身、口、意を以て稽首すとなり。

彼(世尊)自らの爲めに、究竟天に於て受樂し、淨居天(*gTshah-mah-gNas*)の上に住し、彼の無上清淨覺者の處に於て覺者となり給へり。「化身」(*Sprul-pa*)とは、*こん*には佛陀と云へるを説きしに由てなり。

(四) 廻 向 文 疏

是の如く三偈を以て三身を説き、また誓願を作さんと欲するが故に、

「有情の利益を專一に絶へず行じ」(*Sems-Can Don-gCig Rgyum-du mDsad-Cin*) *ツツツ*。「有情の利益」とは、諸の生命を執着するもの、愛欲の利益を能す成就すとの意なり。「有情の利益を專一に絶へず行じ」とは何ぞや。そは有情の利益を專一に絶へず行することなり。是の如き有情の利益を爲したまへる彼に向ひて稽首するが故に斯く結論せり。功德は如何なるものを具するや、曰く。

「無量の功德と大智慧より生じたる」(*bSod-Nams Ye-Ces Chen-po dPag-med-las Byuh-pahi*) *ツツ*ふ。「功德と大智慧」とは、六波羅蜜多を具することなり。そは「全て無量に積集す」とは、量るべくもなし。「功德と大智慧とは無量に生ず」とは、即ち彼より生じたるものなり。「彼」とは誰ぞや。「善逝」(*bDe-bar-gCegs-pa*)なり。端嚴に逝けるもの、或は不退に逝けるもの、法を有するが故に、

善逝なり。再言せば「其自」(Nid) 「真」(Nid) の究竟義に到達せるが故に善逝なり。

「諸の善逝の三身」(bDe-bar-gCes-pa Rnams-Sku-gSum) と云ふは、法身と報身と化身の三身なり、かるが故に其の功德の特殊のものとは何ぞや。

「意と語との道より超脱するが故に」(Yid-Dan Tsig-gi Lam-Las Rab-tu bDas-pa-La) と云ふ。縁せらるべき境より真に超脱すとの義なり。是の如くなるが故に、

「我は信を以て敬禮す」(bDag-gi Dad-pas Phyad-Byas) と云ふなり。

「善き菩薩の種子を總て積集せり」(bGe-ba Byai-Chub Sa-Bon bSags-par-gyur-Can-Yin) と云ふ。

「菩提の種子」とは、「菩提の心」(Byai-Chub-kyi Sem) と云ふ義なり。是を成就し、積集せるなり。この故にその「功德の積集」とは何ぞや。

「これに由て」(Des)、法、報、化の名義を有する「三身を獲得し」(Sku-gSum Thob-Cin) 到達して、

「是等の群生を漏れなく」(hGro-ba hDi-dag Ma-Lus) して餘せず、

「菩提の道に決定して入らしめん」(Byai-Chub Lam-la Nes-par hJug-par-gog) となり。「菩提の道」とは、菩提道にして、かの八支聖道の大道に入らしめて、確立せしめむとの義なり。稱讚せられたる勝者(佛)は、功德を流出する修道境と、甚だ損減なき廣大心藏(Indra, Siva-po)の密義を説き給

ふ。

吾(龍樹)は爰に歳老ひて殆ど高齡に達せしに依て(此の)精釋を以て最も精しく、意義に隨順して此に論證せり。

阿闍梨耶龍樹(Nagarjuna; Ku-Serub)が造りし『三身讚』(Sku-g-Sum-tia bStod-pa)を名くる疏は完結す。

印度の律師「シニラドハーカー・サルマ」(Gradhakura-varma)を、西藏翻譯官「ワンデ・リンツェン・ザンポ」(Vande Rin-Chen bZai-po)との共譯允刊なり。
(北京赤字版『丹珠爾部』首函 p. 80b—82b)

(大正七年十一月二十四日譯了)